



「業平画像」福田眉仙筆(美術博物館蔵)



●業平の歌碑(松ノ内緑地) “世の中に たえて 桜のなかりせば 春の心はのどけからまし” 平成3年・芦屋文化友の会建立

「業平画像」福田眉仙

福田眉仙(ふくだひせん) 1875~1963)によって描かれた業平画像(昭和初期ころ、絹本着色)。美術博物館蔵。縦127.8cm×横56.7cm 掛軸。大正9年に芦屋に居住してからの、晩年を当地で過ごした。六甲山を愛し、その山並みをよく題材としたほか、歴史画も多く残している。本図は、不遇寺蔵「在原業平像」を参考にしたと思われるが、原因よりは柔らかな表情に描かれている。

歌名所としての芦屋

六甲の山並みを背にして、芦屋川の流れが浜辺で交差する辺り、白砂青松の芦屋の浜は、古来より景勝の地として、多くの和歌が詠み継がれてきた歌名所です。都人が西国への往還の途中、初めて潮の香をきき、波間に浮かぶ漁船を遠望するものこの地でした。平安貴族が都に近い観光地として、あるいは別荘地として風雅を楽しんだのも当然のことと言えます。同じ意味で、芦屋から1日で行ける行楽地として布引の滝も平安歌人に知られる所となりました。この、歌名所としての芦屋の浜・布引の滝を考えると、『伊勢物語』が最も重要になってきます。実際に、『伊勢物語』で芦屋の里が歌題になってから、芦屋は歌名所として多数の和歌が詠まれ、そして和歌を題材とした物語絵も盛んに描かれました。近世以降は、絵入り木版本の出現により、物語と絵が、広く一般に親しまれるようになりました。このように物語の享受は、古写本の伝授によるものだけではなく、『伊勢物語絵』などの絵画作品が果たした役割も、また大きかったと考えられます。なかでも、慶長13年(1608)に刊行された嵯峨本『伊勢物語』は、四十九図の挿絵を備えて、本書以降の絵巻・版本などに圧倒的な影響を及ぼしました。

「伊勢物語」と芦屋

芦屋は、古来より歌名所として多くの秀歌が残されています。なかでも、「伊勢物語」に取り上げられた影響は大きく、業平ゆかりの地として広く一般に知られることとなりました。「伊勢物語」の定本では125段の物語があり、芦屋は第87段に登場します。今回は、芦屋ゆかりの第87段や美術博物館収蔵の絵巻物やかるた、また伝承等をご紹介します。

問い合わせ 美術博物館 ☎38-5432



「伊勢物語歌かるた」(美術博物館蔵)

芦屋は在原業平ゆかりの地とされ、業平の父・阿保親王の御座と称する親王塚があり、業平町・業平橋という地名もあります。このような芦屋と在原業平の関係は、すべてこの『伊勢物語』第八十七段に発しています。今回は、平成十二年に美術博物館特別展図録『伊勢物語と芦屋』から、『伊勢物語』の権威者・片桐洋一氏の解説文より、その原文と現代語訳を抜粋してご紹介します。

【第八十七段 第一場面(芦屋の里)】 昔、男津の国、菟原の郡、芦屋の里に、しるよしして、行きて住みけり。昔の歌に、芦屋の灘の塩焼き暇無み、黄楊の小櫓も押さず来にけり。と詠みけるぞ、この里を詠みける。この男、なま宮仕へしければ、それをたよりにて、衛府の佐ども、集まり来にけり。この男の兄も、衛府督なりけり。 【現代語訳】 昔、男がいました。その男は、摂津の国、菟原郡、芦屋の里に、領地を持って住んでいました。昔の歌に、芦屋の灘の塩焼き人である私は、

仕事に忙しいので、黄楊の小櫓を押す余裕もないままに来りました。と、と詠んで、いるのは、この里を詠んだものでした。この歌では、この芦屋の灘と書いています。 この主人公の男は、ちやちやな宮仕えをして、いたので、それを縁にして、近衛府衛門府の次官たちが芦屋に集まってきたのでした。また主人公の兄も、衛府督であったので、一緒にやって来たのです。 【第八十七段 第二場面(布引の滝)】 その家の前に海をのぼり、あそびありきて、いざ、この山の上のありといふ布引の滝、見に登らむ、と言ひて、登りて見るに、その滝物より異なり。長さ一丈、広さ五丈ばかり異なる石の面、白絹に岩を包めらんやうにならむ。いける、さる滝の上に、蓋の大ききして、さし出でたる石あり。その石の上、に走りかかると、水は小椀子、葉の大ききにて、こぼれ落つ。こなる人に、皆、濁る歌詠ます。その衛府督も、詠む。 わが世をば、今日か明日か待つ、かひの、涙の滝といずれ高けん、ま次に詠む。



「伊勢物語絵巻」(美術博物館蔵) 左・布引の滝/右・芦屋の浜



上段2枚・布引の滝/下段2枚・芦屋の浜 「伊勢物語絵巻」狩野探雪・三十九人公家筆(美術博物館蔵)

【親王さんの森】 市域の東部、JRと阪急に挟まれた住宅地、翠ヶ丘町に、静寂を保つ森があります。そこが古くから親王さんの森として市民に親しまれてきた阿保親王墓です。 阿保親王は、平城天皇(七七四)〜八二四)の第一皇子で、桓武天皇(七三七)〜八〇六)の孫にあたり、延暦十一年(七九二)に誕生しています。弘仁元年(八〇一)の藤原薬子の乱に連座して、大宰権帥として筑紫に左遷されますが、十一年後に許されて、都に戻ります。このころ、仲平行平守平、業平の四子に賜姓を請い、在原姓を賜りました。 親王は、上総太守・三原治部卿・上野太守・宮内卿・弾正尹などを歴任し、承和九年(八四二)上総太守

阿保親王墓と芦屋

兼弾正尹となりましたが、この年の十月二十一日に薨去(五十一歳)でした。『続日本後紀』によれば、親王は文武両道に秀でた人でありながら、慎重で深い人であったと記されています。親王が芦屋で葬られたことについては、正史に記載がありません。親王と芦屋の関係については、山口県立総合資料館の毛利家文庫に、『阿保親王御廟誌』、『阿保親王事集』、『阿保親王竹園伝記』等があります。また、親王の菩提寺と伝えられる打出町の阿保山親王寺にも、毛利家の記録が伝わっています。 【阿保親王と毛利家】 毛利家文庫の『江氏家譜』によると、同家は阿保親王の嫡孫、大江朝臣首人の末裔になるため、親王を祖先と仰ぎ、祀り続けてきたことがわかります。



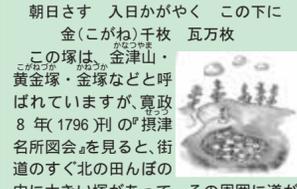
「撰津名所図絵」(寛政8年・1798)に掲載されている芦屋の名所

●特別展「伊勢物語と芦屋」美術博物館展覧会(図録)平成十二年十月発刊より一部抜粋

貴き乱る人こそあるらし、白玉の間なれも散るか、袖のせばきと詠めければ、かたへの人、笑ひ言にやありけん、この歌にめでてやみにけり。 【現代語訳】 その男の家の前の海を、ほたりを遊覧して、男の兄が、さあ、この山の上の方にあるという布引の滝を見に登ろうと、言いつて、皆で登って見ると、その滝は、他と比べられないほどに特異でした。長さは一丈(約六メートル)、広さは五丈(約六十メートル)程の石の表面は、白絹に岩を包んでいるかのようでした。そんな滝の上、に走りかかると、水は小さな櫓や葉と同じ大きさで、こぼれ落ちる。衛府督がそこにいる人、皆に、滝の歌を詠ませませ。もちろん衛府督がまっさきに詠みました。 我が世の来るのが、今日か明日かと待っている、かいらぬ、峽と、流しても効のない、涙の滝と、どちらが高く、どちらが激しく流れ落ちるでしょうか。 主人の男が次に詠みました。 糸の結を引き抜いて、玉を散らさせる人があつたよ。白玉が、このようには、すき間もないほどに散り乱れて、いまでも、拾い集めようにも、私の袖は狭くて、包むこともできないのです。に、と詠んだので、そばにいた人は、大げさに笑うほかに、表現ではなかったのでしょうか、い、え、そうではなく、この歌に感じ入って、そのまま誰も詠まなくなりました。 【第八十七段 第三場面(芦屋の浜)】 帰りに来る道遠く、失せし宮内卿も、ちよしが家の前来て、白晝れぬ、宿りの方をやれば、海人の、漁火多く見ゆるに、かまの男、晴る夜の、星が河辺の、螢か、我が住む方の、海人の、たく火か

金津山の黄金

昔、芦屋地方を治めていた阿保親王は、打出の地に別荘を建てて村人たちを愛し、親しみをもち接していました。村人たちも「親王さん」といって、たいそう敬っていました。親王は、村人たちに「もし、自然の災害などで困ったときには、この塚を掘って役立てるように」と、塚に宝物を埋めたといわれており、次のような歌が伝えられています。 朝日さす 入日かがやく この下に 金(こがね)千枚 瓦万枚



この塚は、金津山・黄金塚・金塚などと呼ばれていますが、寛政8年(1796)刊の『撰津名所図会』を見ると、街道のすぐ北の田んぼの中に大きい塚があって、その周囲に道が造られ、大きな松が描かれています。「打出名所は数々あれど、わけて名高い黄金塚と、打出の御輿かき音頭にも歌われ、街道を行く人々がお参りする名所になっていました。」

「あしや子ども風土記 伝説・物語」より



「若鶴百人一首」(美術博物館蔵)

1月 テレビ 広報ガイド 芦屋市広報番組 あしや30 min. 放送時間(30分) オープニング うんじゃ隊の友 8:00 芦屋市の動き 市議会中継 ネット配信スタート 11:30 新春市長対談 「夢が描ける町 芦屋」山中市長VS大学生 対談者 外山 高広さん・菅 西さん 19:00 特集 「この町がすき」 歌いつぎたい 私たちの町の歌 ※DVD VTR 貸出可

近世大坂文人画の世界 ~関西大学コレクションを中心に~ 【展覧会】 ■展示期間 1月10日~2月22日(月曜日休館・祝日の場合は翌日休館) >午前10時~午後5時(入館 4時30分まで) ■会場 美術博物館 第1・第2展示室) ※同時開催 「昭和の面影3 くらしと道具」 【シンポジウム「大坂画壇展望」】 ■日時 1月10日(土)午後1時30分~3時 ■パネリスト 関西大学教授・中谷伸生氏 / 大阪大学総合芸術博物館教授・橋爪節也氏 / 司会: 尾尾圭造本館学芸課長 ■定員 先着80人(要観覧券) 【本館学芸員による列品解説】 ■日時 1月24日(土)午後2時~3時 ■内容 文人画の評価について みんなで歌いましょう ■日時 1月16日(金) 午後1時30分~3時 ■会場 講義室 ■指導 加藤純子氏(歌) 沖倫子氏(ピアノ) LOVE ASHIYA ■参加費 要観覧券 ※歌集をお持ちでないかた、歌集代1,000円

謡曲「雲林院」 業平と公光 昔、芦屋の里に公光という若者が住んでいました。「伊勢物語」がたいそう好きで、業平に強い興味を持っていました。ある夜のこと、夢の中で美しく咲き乱れた花の中に業平が現れたので、「ここはどこですか」と尋ねると、「ここは京の都の北山にある紫野の雲林院」と教えられ、夢から覚めました。公光は、はるばる雲林院(うんりんいん)を訪ねていきました。ちょうど花盛りで、桜の枝を折ったところへ、老人が現れ、公光をながめました。公光は「芦屋の里から訪ねてきた公光というものです。業平様の夢を見て、ここまで来ました」といいますと、老人は「今夜この花がけで待っている、伊勢物語にまつわる楽しいお話が聞けるでしょう」といって、夕闇の中に姿を消しました。やがて夜になると、業平の魂が人の姿となって現れ、伊勢物語のことを語り、舞や音楽の遊びを続けているうちに明け方となり、公光の夢は覚めました。 【あしや子ども風土記 伝説・物語】より 謡曲「雲林院」(室町時代)は、能の創始者・世阿弥の自筆本が残る能本九曲の内一つです。